

イエスは、洗礼を受けるためにヨハネのもとにやってきます。しかしヨハネは、イエスの受洗を思いとどまらせようとした。正しい方であるイエスは、悔い改めの洗礼を受ける必要などないと思ったからです。しかし、イエスは言われました。「正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」(15節)。イエスは、神の望まれる「正しいこと」を行うために、洗礼を受けるのだと言うのです。当時の洗礼は、川に全身を沈める形で行われました。それは、本来、罪の悔い改めの洗礼を受ける必要のないイエスにとって、人間の罪にまで身を沈め、寄り添おうとする象徴的な行為であったとも言えるでしょう。イエスはその姿勢を、十字架の死に至るまで貫かれました。藤木正三牧師は、「どうにもならないことにそれでも寄り添ってくれる、慰めです。そして宗教の本質はこれです。」とした上で、イエスの十字架での死こそ、どうにもならない人間の罪への徹底した「寄り添い」であったと捉えています。イエスは、その「寄り添い」にこそ、私たちに必要な救いがあることを、身を持って示そうとされたのではないのでしょうか。

誰かに寄り添うこと、それは具体的に色々な形をとります。例えば、ある方は「“の”の字の哲学」を提唱しています。「もし誰かが『ああ、疲れた』と言ったら、『疲れたの』と言ってください。『暑かったあ』と誰かが帰宅したら、『暑かったの?』と言ってください。…相手が『疲れた』と言った時に『私だって疲れています』とか、『暑かった』という言葉に『夏だから当然よ』と言えば喧嘩になります。まず、相手の気持ちを受け止めてください。自分の言い分もあるでしょう。しかし、その気持ちを少し抑えて相手の気持ちを理解しようとする、その姿勢がとても大事なのです。“冷たくない”だけでは不十分です。“ぬくもりのある”対応が求められています」。相手の気持ちに寄り添おうとする一つの形です。

神が「私の愛する子」(17節)と呼ぶイエスが殺されていく。そんな胸を割かれるような出来事を引き受けてまでも、神はこの世を、私たちを理解しようとした…イエスの十字架とはまさに、神の究極とも言える「寄り添い」の形でありました。そして今もなお、神がイエスを通して残された数々の聖書の言葉は、私たちが言葉にできない気持ちを映し出し、代弁し、寄り添ってくれているのです。この神の寄り添いを受け取りながら、私たちも、それぞれにふさわしい寄り添い方を互いに担い、神の望む平和を世に証する者でありたいと願います。

(文責：望月達朗牧師)

